

# 研究会レポート

## 地域産業研究会 (社)日本技術士会北海道支部/ 北海道技術士センター

### 恒例会とエゾシカ、寿都

今回、地域産業研究会レポートは2回の恒例会と分科会の最近の活動報告である。

体験談が示された。

(文責：地域産業研究会 斎藤 和夫)

#### 【第2回恒例会】

日時：2004(平成16年)10月14日(木)

午後6時～午後8時

場所：ホテルクラビー内のレストラン

講演：北海道の食産業の現状と課題

講演者：貫田料理長

第2回恒例会はこれまでの討論会形式で行ってきた形から、ひと味趣向を変えホテルのレストランにて食事をしながら北海道の食文化を考える懇談会形式とした。食事の内容は右のメニューに示した。いずれも貫田料理長が自ら食材を選定し、腕をふるった料理である。

講演では、食材の供給地域を巡るために、年間約60日間、地方に向かっていることである。訪問先では土のにおいを嗅いだり、海の水をなめたりすると、土壌や水の健全度がわかり、食材の味覚に微妙な影響が出ることを示された。具体的に塩鮭を例にとり、きちっと漬けた塩鮭のおいしさを示し、何がそれらの中で違うのか、現場に行き確かめることが大切であることを力説していた。

また、貫田氏は「地域づくりは食おこしから」を念頭に、身近にある食材を見直すことが原点であることを示された。特に我々を取り巻く社会が都市化され、効率化追求の実態を「おなかは満たされたが、こころは満たされない状況」として指摘した。子供がキレル。体力が落ちた。イライラする。親子関係がおかしい。最近、耳にするこのような問題点をあげ、食生活に原因の一端があること、子供を大切にすることの必要性をあげていた。最後に置戸町の学校給食に向き、400人分の料理を手がけたことの



写真-1 各テーブルを囲んでの懇談風景

**北海道・秋の味覚を訪ねて**

**日高門別・石崎さんのタコと生のダイコン**  
石崎さんが漁獲して半生ボイルしたタコのハーブ風味  
道央・由仁町・伊藤さんの無農薬ダイコンを添えて

**津別町・谷農園産ゴボウのポタージュ**

**様似ツブと日高コンブのトマトソース**  
様似トウダイツブと生食用で様似産の日高コンブ使用

**網走産オホーツクサーモンのカツレツ仕立**  
網走支庁で捕れたカラフトマスの愛称  
網走合同定置漁業の元角氏より直送

**十勝牛のやわらか煮込み、トマトのソース**  
道北・苫前町・関さんの無農薬ポテト「キタアカリ」

**仁木町・紅玉リンゴのコンポートと  
長沼・村田さんの卵でつくるプレーンアイス**

平成16年10月14日  
ホテルクラビーサッポロ料理長  
北海道地域づくりアドバイザー

貫田 桂一

### 【第3回恒例会】

日時：2004(平成16年)11月18日(木)

場所：環境サポートセンター 出席者：14名

講演：道工試による地場企業への技術支援

講師：尾谷 賢 氏

(北海道立工業試験場 技術支援センター 所長)

本恒例会は、低迷を続ける北海道経済を活性化するために、中小企業の技術支援について、どのような方策で進めてゆけばよいか、また、その際、大学等の研究を企業に技術移転する際のコーディネートについて話していただいた。



写真-2 第3回恒例会の様子

#### 1. 北海道立工業試験場の紹介

試験場は大正11年に設立され、昭和24年に北海道に移管され「北海道立工業試験場」となった。現在の研究関連組織は、情報システム部・環境エネルギー部・材料技術部・製品技術部と、場長のもとに「技術支援センター」を設置し、研究成果や技術移転の支援・技術情報提供の役割を担っている。

また、本年4月より産学官の連携や新事業・新産業の創出支援をするコーディネーター役として研究参事を新設した。

尾谷氏は「当試験場は研究所ではない。地域の企業への技術支援が目的である」さらに「試験場の役割は、最終的には実用化・事業化である」「このことは研究・教育機関である大学と大きく異なるところである。」と述べられた。

以下に当組織のユニークな活動を紹介する。

まず、技術相談や技術指導は無料で、2003(平成15)年度は技術相談2,570件、技術指導158件あり、道内製造業事業所数8,000弱のうち約1,500社(約20%)の企業と繋がりを持っている。

また、ユニークな事業として「技術開発派遣事業」がある。これは中小企業等への技術開発を人材面から支援するため、支援センターの研究職員を派遣するもので、1日当たり7,600円/人で、21日以上3カ月以内(実際は1年間のこともある)派遣するものである。この事業を上手く利用すれば、研究開発費が安く上がる可能性も示唆している。

#### 2. 産学官連携

今後我が国が科学技術立国を目指すうえで、積極的に大学等の知を活用することが必要で、このためには「産学官連携」が重要かつ不可欠なことである。

道内では、北大の北キャンパスエリアに「北大リサーチ&ビジネスパーク構想」があり、コンセプトとして「研究開発(知の創造)から事業化(知の活用)までの一貫した機能の整備」が掲げられている。

本地区には、北大の研究施設(触媒化学研究センター、次世代ポストゲノム実験棟、先端科学技術共同研究センターなど)や道立研究機関(工業試験場、衛生研究所、環境科学研究センターなど)のほかに、これらの研究機関の成果を地域の産業界が活用するために設置された「北海道産学官協働センター(愛称：コラボほっかいどう)」がある。

今後、北大北キャンパス・周辺エリアは最先端の研究ゾーンとして一層の集積が進み、研究開発を背景とした、産学官連携の拠点として注目される。

#### 3. 産学官連携を担うコーディネーター

今後産学官の連携がますます進む中、それぞれが異なる文化を持っている。このため、産学官の連携を担うコーディネーターが重要な役割を果たす。コーディネーターに必要なスキルとして、①行政の各種科学技術、産業振興施策、②技術予測と評価、③マーケティング、④知的財産権とライセンス、⑤ベンチャー起業、に長けた人材が求められる。

このコーディネーター役として知識・経験が豊富

な技術士が適任であり、期待されている。

(文責：地域産業研究会 伊藤 恒雄)

## 【分科会活動】

### 1. エゾシカ分科会

今年度の活動は4/20の「エゾシカ飼うべ」の出版から始まったが、その後、マスコミ等に取り上げられたこともあって開発局・道・各市町村・大学・高校・研究機関・公立図書館・マスコミ関係など関係各機関への寄贈(約700部)や一般販売(約750部)など、印刷した2,000部中、既に12月末現在、1,500部余りを配布している。

また、発刊後3度にわたって普及講演(根室支庁主催2度、NPO北海道振興機構主催1度)を行うなど、エゾシカを活用した地域振興に向けた活動を継続している。



写真-3 道東4支庁長会議(6/24)での講演風景

このほか、定例の分科会を12月末までに4回開催し、各地で計画されている養鹿構想に対し、検討・協議を行った。

また、高橋北海道知事や複数の道議会議員との懇談、および道や(社)エゾシカ協会との連携を深め、「エ

ゾシカ飼うべ」を通じた具体策の策定に奔走している。さらに、再度、ニュージーランドを視察する構想も持ち上がっており、次号ではその結果報告を行いたい。

(文責：エゾシカ分科会座長 五十嵐敏彦)

### 2. 地域活性化分科会

地域活性化分科会は、大きく2つのテーマで活動を展開している。ひとつは、「寿都ファンクラブ」としての活動であり、もうひとつは、「美しい海づくり研究」である。

「寿都ファンクラブ」は昨年につき、8月6日から8日、寿都町教育委員会主催の「自然体験サバイバルキャンプ」へのサポートをおこなった。寿都町の教育サポートへの参加は地域産業研究会・地域活性化分科会がこれまで寿都町と地域の活性化問題にともに取り組んだなかで、技術士会からの提案に寿都町が理解を示し実現したものである。

これは、寿都町教育委員会の主催する行事に技術士会が協力するという形で実現した。出前授業などの教育サポートは、リージョナルステート研究会・自然科学教育分科会で取り組まれていたものであり、2つの研究会が共同でサポートをしている。

「美しい海づくり研究」は、昨年海・山・川・農・街の4グループによる現地調査に引き続き、山グループが「法人の森」および「月越峠」の森林概況調査、林相図の展開のために、寿都の山への二次調査を行った。これらの寿都町をフィールドとした調査・研究は、さらに次年度への展開を目指し、これまでの調査と、今後の調査についての整理を進めている状況にある。

(文責：地域活性化分科会座長 岩崎 元彦)